小悪魔通販ができるまで

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小悪魔通販ができるまで

【Ｎコード】
Ｎ８８２４Ａ

【作者名】
寿々

【あらすじ】
連載小説「小悪魔通販にようこそ」の続き小悪魔通販にいた４人の過去の物語。

アメ＝遠藤亜魅編　第一部（前書き）

まず、「小悪魔通販にようこそ」を
読んでおかないと、分かりにくいかもしれません。

アメ＝遠藤亜魅編　第一部

「亜魅ちゃん！おはよっ！」
ウザイ。聞くに堪えない黄色い声。
「おはよっ」
なれなれしく関わってくるこの女が嫌いだった。
遠藤亜魅。これが私の名前。
この名前は本当のお母さんがつけてくれたもの。
でも、今目の前にいるのは・・・・
偽者の母親。

「ハンカチとか持った？忘れ物無い？」
「大丈夫だってっ！行ってきます」
毎朝笑顔を作るのは疲れる。

いつも母と歩いていたこの道。
買い物の帰りとか、雨の日とか。
雨の日は嬉しかった。私は母が大好きだったから。
なのに・・・・・・・
「お母さんは、脳梗塞で・・亡くなったんだ・・・」
突然目の前から姿を消した母。
そして、いきなり目の前に現れた、偽者の母。

「亜魅。おはよう」
突然横に現れたのは、随分と前から一緒にいた、友達・・？？
「おはよ。恵理華」
何のためらいも無く、その他人の名を呼ぶ。
今は苦しくてたまらない。
「今日、体育あるよね。いやだなぁ」

恵理華の背負っていたランドセルがカタンと動く。
体育・・得意なくせに。私のほうが、体育なんて嫌だ。
運動音痴だし。男子にからかわれるし。
その点、恵理華は先生にちやほやされてる。

私は、自分の才能を疎ましく思うこの女も嫌いだった。

「いいじゃん。恵理華は。私より、運動上手だし」
「え～？そんなことないよ。亜魅のほうが上手だよっ」
なに分かりきった嘘言ってんの・・・？

この、疎ましい世界が大嫌い。
私以外の人間なんて、いなければいいのに・・・・・・・・・。
そしたら私は、苦しまないし、傷つかない。

アメ＝遠藤亜魅編　第二部

「中原恵理華、記録、１４秒１８！！」
周りからどっと歓声が上がる。ついに、私の嫌いな体育の時間だ。
恵理華！すごいじゃん。とか、てんさーい！とか・・・・・・・・・
その中心でちやほやされてるあいつが、無性に嫌だった。
恵理華は、私に向かってピースをした。
私もそれを返したが、あいつが疎ましく思えるだけだった。

「じゃ、次、遠藤亜魅」
何人かが「がんばってっ！」と声をかけてくれたが、嬉しくも何ともない。

「遠藤亜魅。記録、１８秒４３！」
一般人には普通だろうけど、いじめられてた私は、また男子にからかわれた。
「うわー。遠藤ってめっちゃ遅い！」
「のろまー！俺のほうが絶対早い！」

でも、そんな声も、この一言で収まった。
「やめな！亜魅がかわいそうじゃん！だいたい、どこが遅いのよ！全然普通ジャン。毎回毎回ウザイんだよ！」
恵理華は気が強かった。ついでに頭もよかったから、男子も逆らえなかった。
「なんだよ！いい子ぶって」
口ではみんなそういうが、恵理華に勝てた奴なんていない。

「大丈夫？ほんっとサイテーだよね。あたしもあいつらだいっきらい！」

「ありがと、私は大丈夫だから」
「ほんと？無理しちゃだめだよ」
無理って・・わけわかんないんだけど・・・
そう言ってもあいつには、負け犬のとおぼえにしか聞こえないだろう。

「亜魅！怪我してる！」
そんなことにも気づかないほど、私はあいつを睨んでいたのか・・
「・・・ほんとだ・・・」
「保健室、行く？ついてってあげる」
「大丈夫だよ。一人で行くから」
「でも・・・」
「大丈夫！気にしないでっ。ねっ」
あぁ、ウザイ！いったいいつまで言えば気が済むの！？
だいたいいっつも付き纏って
私は、そんな弱い子に見えるのかな・・・

私は、私自身も大嫌いだった。

アメ＝遠藤亜魅編　第三部（前書き）

グロテスクなシーンあり
ご注意を

アメ＝遠藤亜魅編　第三部

放課後の時間が、一番好きで、一番嫌い。
好きな理由は、学校という束縛から逃れられるから。
嫌いな理由は、偽者と顔をあわせなきゃならないから。

「亜魅！おかえりっ。おやつあるわよ？」
「後で食べる。置いといて」
家に居座っているこの女。香水のにおいがぷんぷんする。食欲なんて、すぐ失せる。

ばたん。
あぁ、おちつく。
やっぱり、私は私の部屋が一番好き。
誰も入ってきてほしくない。
ここは、私の領域なのだから。
偽者の母親。それをなんとも思わない父親。

私の頭に、一つの案がよぎった。
ケス。
！？
ちょっと待って。それは、犯罪でしょ・・・・。
いくらなんでも、やばい・・・・。

「あーみーっ。いつまで寝てる気！？寝坊して学校遅刻よ！」
昨日、そのまま寝ちゃったみたい。
まだ、頭には、二文字の言葉がよぎっている。

ケス・・・・・・・・・・・・・

ふいに窓の外を見ると、人間がたくさんいた。
ごみ捨てにきたとか
朝のジョギングとか
犬の散歩とか・・・・・・・・。

嫌だ。自分以外の人間を見るのは。母親と自分以外を目に映したくないっ！！
「亜魅。さっさとご飯食べて・・・・・・」
私は無意識に包丁を取ると、ギロリと目をむいて、そこにいる女に突き刺した。
「死ねっ！偽者！お母さんをかえせ！偽者！偽者！死ね！！」
グサ。
グサ。
父は目を丸くしている。
私の息は荒かった。
「ぜぇ・・・ぜぇ・・」
「亜魅！お前・・・何をしているんだ！！」
父の方に振り向くと、今度はそいつを襲った。
「なんで！お母さんを捨てて、ほかの女と結婚したの！！
私、あいつがだいっきらい！今のお父さんも、だいっきらい！！！！」

血で薄汚れたまま、学校へ。
誰にも会わずに学校へ行けた。
それもそうだろう。
だって、もう、一時間目始まっちゃってるから。

「遠藤さん！遅刻ですよ！」

先生が私を叱った。男子がニヤニヤ笑ってる。

（アイツラモ、ケサナキャ・・・・・）

いつもどうり、けなされて
いつもどうり、かばわれて
うんざりする。毎日が。
人間なんて、生まれなきゃよかったのに。

理科室を通りかかった、そのときだった。
理科室の中から、声がする。
よく聞くと、恵理華の声。
「亜魅。今日遅刻してたね。ばかみたぁ～い」
「ちょっと優しくしてやったから、気ィぬけたんじゃね？」
「そのままセンコーにも嫌われちゃえばいいのに！」
理科室に高らかな笑い声が響く。不思議と、悔しくも悲しくもなかった。
ただただこみ上げてきた思いは・・・殺意。

ガラッ！
恵理華たちは驚いていたが、気を取り直したように、私の方へ歩いて来た。
「どーしちゃったの？負け犬さん？また男子に絡まれちゃったの？」
私は何も喋らなかった。
「何とかいえ！クソアマ！！」
一人が、私の頬を引っぱたいた。痛くなんかない。
これから、もっと痛い目にあってもらうから、こんなの痛いうちに入らない。
グサ。そいつの腹に包丁を突っ込んだ。
「いぎゃぁぁぁっ！！」

「痛い？痛いだろうね。少なくとも、さっき私が感じた痛みよりは」
そいつはすぐ死んだ。ガキは生命力が少なすぎる。

2人、3人と、私の目の前から姿を消した。
「いやぁぁぁ！」
「ぐぁぁぁああ！！」
残りは、恵理華一人。
「ご・・ごめん。亜魅・・・。誤るから、お願いだから・・。殺さないでっ・・・」
「無理。私、あんた嫌い。トップだからって調子に乗って、いい子気取り。虫唾が走る」

さよなら

理科室は血まみれ。あいつらの心もきっと血まみれ。私の心は、達成感と、青空。

アメ＝遠藤亜魅編　第四部（前書き）

グロイです
めちゃめちゃ要注意。

アメ＝遠藤亜魅編　第四部

もう、４・５人殺さなきゃ。
私のはらわたは煮えくり返っている状態。
冷静さもあるのだけれど、その奥にひそんでる興奮状態が大きい。
私は、自分のスカートについている返り血をゴシゴシと適当にふき取って、校庭へ向かった。

「被害者は？」
「遠藤透（３４歳）と、遠藤佳奈江（３１歳）です。遠藤佳奈江は、遠藤透の再婚相手です」
私はまだ気づいていなかった。自分の家に、警察がおしかけてきている事を。
「この二人の間に子供はおらず、遠藤透の昔の妻の子供が一人います」
「妻は、今どうしているんだ？」
「脳梗塞で、亡くなっています」
「ふぅ～ん」

校庭では、男子が（私をいじめていた奴ばかり）５人いた。
いつもどうりの私を演じて、近づいた。
「恵理華が・・理科室にキテって・・・呼んでるんだけど・・・」
オドオドした私も、今日でおさらばだ。
男子はちょっとびっくりしていたが、なんかニヤニヤして、理科室へ走っていった。
（・・・・ムカつくな・・でも、その先にあるのは地獄だよっ！）

男子が我先に！と、理科室のドアを開けた。
中に入ると、ようやく異変に気づいたようだ。

「なんか・・・生臭くねぇ？」
「血ィっぽい臭いがする・・・」
バタン！！！
私は入った後にガチャリと鍵をかけ、部屋を明るくした。
「ヒィッ！！」
そこには、何度も包丁で刺されてぐちゃぐちゃになった恵理華たちの姿が、
はっきりと映し出された。

悲鳴にならないような悲鳴が、理科室を飛び交った。
そこで・・・なぜ私は考えなかったんだろう。
廊下の横を、先生が通る、という事を。
「君たち！理科室は遊ぶところじゃないの・・・・よ・・！？」
そのときすでに、男子は全員死んでいたが、私は動揺した。
「いやあああああーーーーっっ！！」
そのときは、何も考えずに先生を刺した。
「黙れ！煩い！黙れーーーっ！！」

理科室には、念入りに鍵をかけ、わざと虫がわくように、１２人の死体を放置した。
女子が６人。男子が５人。先生が１人。
これで、立派な殺人犯だ。
親もあわせたら１４人。いや、あんな奴ら親じゃない。
・・見つかったら即死刑だな。別に、怖くないけど。

「娘の名は？」
「遠藤亜魅。これは、昔の母親がつけた名です。
近所の人によると、おとなしくて賢い子だそうです」
刑事が、手をくんで考えた。
「そーゆー子ほど、何するか分かんないからね

ま、帰ってくるまで待つとするか」

（ナニ・・！？あれ・・）
私の目の前には、家を取り囲んでいる刑事たちがいた。
（こうも早くサツが嗅ぎつけてくるなんて予想外ね。どーしよ・・）
とにかく、普通の子を演じて、私は十字路を飛び出した。
「あ・・あの・・何かあったんですか・・？」
警察はいきなり女の子が飛び出してきたので驚いた・・
というような表情を見せていた。

「お父さんとお母さんが・・！？！？
そんなっ・・・！！！！」
泣きじゃくる（ふりをしている）私を見て、警察は戸惑っていた。
今日はこの辺で・・・と、警察は帰っていったが
私はちょっと焦っていた。

「もうここには居られない・・・・」
適当に荷物を引っ掴むと、深夜2時くらいに家を出た。
かばんの中には、服と、洗面用具と、母が持っていたヘソクリ（50万）と、愛用のノートパソコンが入っている。

「やられた！！！」
翌朝、小学校で惨殺事件が発生した。
私がやったことだ。
「昨日の事件の犯人も・・！！」
「おそらくあの女の子だろう！すぐに指名手配しろ！！」
私は指名手配犯になった。
それからすぐに出会ったのが
今の、ミーウェイ。

アメ＝遠藤亜魅編　第五部

初めて会ったのは、街の中。
ガードレールの上に乗っていて、
はっきり言ったら、めちゃめちゃ美人。
灰色のコートと、真っ黒な髪と目。
思わず、私は見とれてしまった。

ちょっと近づいてみたらすぐ分かる。
血のにおい。
皆が避けて通っていく
理由が分かった。
「あなた、ヒト、殺したでしょ」
なぜかよく分からないけど、私は声をかけた。
「あんた、誰。つーかあんたもヒト殺してるんじゃねぇの？」
「正解。まぁ、あなたの同類っぽいもんかな」
「へぇ～。あ、もうちょっと詳しく話したい。あたし奢るから、ちょっとおいでよ」

ミーウェイに誘われていった場所は
怪しげなカフェ。
「あたしは木村未兎。あんた、名前は？」
「私は・・遠藤亜魅」
「ふーん。面白い名前」
「あんたもだよ！っと、未兎って呼べばいい？」
「いいよ、あたしも亜魅って呼ぶから、つーか呼ぶつもりだったし
おーい！瑞貴！グレープジュース！あんたは？」
私は、グレープジュースが大嫌いだった。
「オレンジ」

「じゃ、オレンジジュースッ」

奥から出てきたのは
髪がウニ頭の
小柄な少年。
「紹介するよ。高野瑞貴。こいつも同類。あたしの友達」
「ふーぅん・・。ヨロシク。瑞貴」
「ナニコイツ。すんげーむかつく。おい、お前名前は？」
コイツが後のコウヤ。ぶっきらぼうだったので、私も同じように答えた。
「遠藤亜魅」
「うっわー。マジでむかつく。まぁいいや。どーして連れてきたの」
「なりゆきってやつよ」

こうして、小悪魔通販のメンバー3人がそろった
アンナが来るまでに、そう時間はかからなかった

アメ＝遠藤亜魅編　第六部

カラン・・
カフェのドアが開いた。
私は飲んでいたオレンジジュースを手に持ったまま後ろを振り返った。
年は、私が小6だから、同じくらい。
でも、なんかお嬢様？みたいな・・・。
「アイスコーヒー。一つ。頂けますか？」
「はいよ」
瑞貴は奥に消えた。
（未兎。臭うんだけど・・・）
（血・・じゃないね。詐欺かペテンか・・）
以外にも、アンナは私達の近くに座った。
ピンクのカーディガンに淡い白のロングスカート。
それに似合わない黒のバレッタ。

「ねーねぇ。名前なんてーの？」
先に切り出したのは未兎だった。
「名前？楠杏奈」
「私、遠藤亜魅。こっち、未兎！木村未兎」

瑞貴は3人の様子を遠くから見ていた。
（未兎の奴。危ないのを拾ってきたな・・・）

「私の専門は詐欺カナ・・・。3年生くらいの時から人を騙すのはスキだったな・・」
「あたしは殺人だネ。専門の凶器は、釘とかそんな感じ？
瑞貴もだよ。あ、瑞貴ってのはさっきの男の子ねっ」

そのとき私は思った。
人の命を塵とも思わないこいつらなら
一緒に居られるんじゃないかって。

「アイスコーヒーだよ」
「有難う」

「ねぇ、提案があるんだけど」
私は切り出した。みんながこっちをむく。
「どした？なんか面白い事？」
「うん！あのね・・・・」
私は乗出した。
「ＰＣサイトを作ろうと思うんだけど」

「パソコンサイト！？なんで？」
私は飲み干したオレンジジュースのコップを瑞貴に渡した。瑞貴はしかめっ面をした。
「パソコンサイトってのは思いつきだけど
なんか、今の自分が嫌いだから
名前も、性格も、喋り方も、全てを変えたいの」
未兎はニヤリと笑った。

「あたし、その案のる！瑞貴もね！」
「俺も！？」
「私ものる。いいでしょ？」

それから向かった場所は、未兎の家の近くにあったプレハブ小屋。
「せっま・・。こんなホコリ臭いとこはじめて来た・・・」
「マジで！？杏奈お嬢様だったんだぁ～」

「そうじゃないけど・・、こーゆーのは見たことないから・・」
遅れて瑞貴が入ってくる。
「パソコン。コレでいいだろ？コードとかならちっといじれば出来るし」
「瑞貴すごーい。そんな事できたんだー」

3人が話してる間、私は新しい名前を考えていた。
新たな私として生きるために。

「ねー。私名前決まったよ。発表してもいいカナ？」
「名前！もう決まったの？言ってみて」
私は座布団の上にちょこんと座って笑った。
「アメ、なのです」
「アメェ？なんで？つーか、なのですってナニ？」
「その辺は、秘密～なのですぅ～」
ほんとは、母との思い出だけを残したくて
一番好きな、雨にした。

次に声を上げたのは瑞貴だった。
「俺！俺決まった！」
「ナニ？？」
未兎も安奈も座布団に座る。
「コウヤ！！」
「コウヤァ？？何よそれ」
「荒野っていう漢字あるだろ。あれ」

今まで考え事をしていた杏奈が顔を上げた。
「私は、アンナでいいや。カタカナにするだけで、印象変わると思うし」
「えっ！アンナも決まったの！？あたしだけ！？どーしよっかな・・

・」
「もう、未兎のままでいいんじゃね？」
「やだよ！仲間はずれっぽいじゃん！！」
一生懸命頭をひねっていた未兎がにやりと笑った。
「ミーウェイ！これでいこう！！」
「ミーウェイ？変わった名前なのです」
「面白いでしょ。一味違って」

ここから、小悪魔通販は始まる
その辺は、みんなの過去話が終わってから、お伝えするとしましょう、なのです。

ミーウェイ＝木村未兎編　第一部

夜の東京
あぶれた若者たちが、組を作って歩く。
「未兎ちゃぁ～ん。こっちこっちぃ～」
「ごっめーん！遅れちゃってぇ」

木村未兎。あたしの名前。
歳は１３歳。１３っていえば中一。
なのに、あたしは夜遊びばっかりしてた。
何もかもが嫌だった。

「未兎ちゃん偉いよね。最年少なのに、このサークルに毎日来てるもんね～」
「だって、楽しいんだもん♪」
「かわいい～っ！未兎ちゃんかわい～いっ」

このサークルと言うのは
ただ、夜の東京を遊び歩く、と言うサークル。
たまに、いや、絶対に補導警察に見つかる。
「キミ達、高校生だろ？家に帰りなさい」
あたしは背が高めのほうだから、一緒にいても中一に見られたことは無い。
「え～？あたしら、大学生だもん」
バレバレの嘘を平気でつく。
「未兎、今のうちにあんたらはそこの路地に入りな」
あたしたちはこっそり路地に入る。
で、そのうちに、ほかの子たちが上手く補導警察官をまいてくれる。

「ねーねー！あれみてよ。もう1時なのに、まだ塾やってるよ！」
「ほんとだ！あれ、有名進学塾らしいよ
ウチラには別の次元のはなしだよねぇ。ね、未兎」
「そーだねぇ」

あたしはほんとは
あの次元の人間だった。
小学生から１２時まで勉強して
親からは絶大な期待を受けていた。

「未兎。もうお開きだから、明日は１０時集合ね。未兎？ちょっと、聞いてるぅ？」
はっと我に返ったときは、４時だった。
「う、うん！わかった！１０時ね！じゃ、バイバイっ！！」
「え？うん！バイバーイ！明日も来てね～っ」
あたしは、走って帰ったが、家が近くなると、歩みを止めた。
また、嫌な一日が始まる・・・・・・

「未兎！またあんたは・・どこに行ってたの！」
「うるさいな・・・・・。あたしの勝手じゃん。
もうご飯いらない。行ってきます」
「未兎！！！」
あたしは朝食を取らなかった。
お腹が減ってないのもあったけど、あんな怒声の中で食べられない。

家を出たはいいけど、学校がある。
中学生は義務教育だから、行かないわけにはいかない。

「木村！お前、髪を黒くしろって言っただろ！」
「我が校初めてだわ！一年生からこんな・・・」

毎回毎回、1年2組には、センコーが2・3人詰め掛ける。
「どいつもこいつも・・・うるさいな・・」
「お前！教師を馬鹿にしているのか！もう一回言ってみろ！今度こそゆるさ・・」
「うるせーッつったんだよ！この腐れハゲメガネ！！黙ってろ！つーかとっととでてけ！」
1―2の生徒は、多分全員びびっているだろう。
ま、1人くらいはにやにやしてそうだけど。

その日は、頬に4発ビンタをくらった。
父兄を気にしているのか、全然痛くなかった。
父兄にビクビクしてるのに教師勤めてる、笑っちゃうね！

一時間目はあたしはぼけっと黒板を見て、
退屈になったらメールして
眠くなったら寝る。
だれもあたしを注意しない。

2時間目はサボろうか、なんて思って
教室を出ようとしたとき
制服を掴まれた。
「あ？」
後ろには、あたしより背の小さい、みつあみの女の子がいた。
多分この子は・・・・
佐藤由香里。
成績もいつもトップ・・らしい。
そんな子が、あたしに何のようだろう。
「何？」
「えっ・・・と、あの・・大丈夫・・？」
「何が」

「せ・・先生に、打たれちゃったトコロ・・・」
「別に、それだけのために呼んだの？あたし、行ってもいい？」
「待って！」
由香里はまだ話し続ける。話し方がウザイ。
「何！」
「どこ行くの・・・・？」
「屋上！」
由香里は顔を赤くして、あたしを見た。
「私も行っていい？？」

これが、あたしの、学校で出来た、初めての友達。

ミーウェイ＝木村未兎編　第二部

「あんたさぁ・・授業出たほうがよくね？
仮にも優等生だしさ」
由香里はしゅんとした顔でこっちをむいた。
「・・なの・・・・・・」
「んぇ？」
「勉強、したくないの。もう、やなの・・・・・」
あたしはびっくりした。
昔のあたしと、同じ、そっくり・・・・。
「み・・未兎ちゃんはね、先生にも屈しないし、好きに生きてるしいいなぁ・・なんて思っちゃって・・・」
あぁ
この子もレールの上に乗せられているんだ。
親や、センコーが決めた、勉強という期待のレールの上に乗せられて、それでもがんばってたんだ。

「じゃ、今日一日だけ、あたしと遊ぼ
今日だけね。今日だけ」
「ほんとに！？ありがとうっ！」

「おい！木村はともかく、佐藤はどうした！？誰か、知らんのか！？」
１－２の教室。先生も、生徒も、ざわついている。
「せんせー。木村さんと由香里が一緒に屋上行ってるのを見たらしいでーす」
後ろの方から、何か聞こえる。
「由香里どうしちゃったんだろ・・？あんなヤバイのと一緒にいたなんて」

「カツアゲとかされてないよね・・・・」
「あたしにはわかんないって！！」

その頃、二人は街中のゲーセンにいた。
「こんなうるさいトコロ初めて来た・・・」
「ゲーセンだよ。知らないの？」
「うん。ゲーセンってゲームセンターの略したやつ？」
ほんとに、何も知らないんだな

その後、あたしはいろいろ案内してやった。
カフェとか、カラオケとか、いろいろ。
そしたら、午後１０時を回っていた。
「やばぁ！！あんた、一人で帰れる！？あたし用事あるから！！」
「用事？こんな遅くに？」
「うん！！じゃぁバイバイ！！」

「未兎おっそーい！どしたの？まだ制服のままだし！」
「ちょっと・・・・あって」
「ふぅ～ん。ま、いいや！いこっ！」

あたしはなぜか、由香里のことが、とても、とっても気になっていた。

ミーウェイ＝木村未兎編　第三部

未兎の嫌な予感は当たった。
翌朝、由香里は学校へこなかった。
なんでも、昨日夜遅く帰ってきたから
親がさんざん怒って、家から出してくれないらしい。
たしか、由香里の家は、佐藤グループの社長なんだとか。

「木村。お前、とうとうほかの子にまで危害を及ぼしやがって」
あたしは昼休みに呼び出された。センコーは呆れていた。
「あたし、悪くないもん。由香里が行きたいっつーからつれてってあげたのに。
あたし、なんでとばっちり受けなきゃならないの」
反省はしなかった。いや、する必要もなかった。
それからうだうだグダグダ言われてから、あたしは解放された。

「未兎・・・・・・・。よそ様の子に何かしたってほんとなの？」
帰ると、扉の前で母さんがいた。あたしの気はめいった。
「ちがうもん！あたし悪くないもん！あたしがなにしたってのよー！！」
あたしは、不覚にもその場で泣き崩れてしまった。

苦しかったので、あたしは、今日のサークルを休むことにした。
「紗枝ちゃん？ゴメン。あたし今日のアレ、休むわ」
友達の紗枝はびっくりしていた。
「なんでぇー？いつも来てたじゃん！どしたの？風邪！？だったらお大事にネ！」
風邪とは言ってないのに風邪と決め付けている。
これが、紗枝の悪いところ。

まぁ、この状況じゃそのほうがいいけど。
「んー。そんなもんかな・・。明日もいけるかどうか分かんないからっ」
「えー、つまんないなぁ。明日渋谷歩くのに・・・・・」
「マジで!?行こっかな・・」
「じょーだんだよーだ!」
「紗枝ちゃん!!」
こんな会話が、１０分くらい続いた。

「じゃ、お大事に～。ゆっくり休むんだよ。リーダーにはウチから言っとく!それでいい?」
「ん、ありがと。それじゃぁお願いね。バイバイ」
「うん。バイバ～イ」

次の日は、学校を休んだ。
由香里は、学校に来たそうだ。
そんで、あたしのトコロに見舞いに来た。
「由香里ちゃんって子が来てるけど、出る?出れる?」
出たくないけど、母さんが出ろと言ったので、仕方なく玄関へ行った。
母さんは言ってることがおかしい。

「ごめんね。私のせいで、未兎ちゃんが怒られちゃって・・・・・」
「別に、気にしてないから」
言う事がなくなって困った。
由香里の口が開く。
「あ・・こんな事言って、なんだろうって思うだろうけど・・・
これからも友達でいてくれるかな」
あたしは正直嫌だった。

でも、気が変わってＯＫしてしまった。

なんであんなことしたのかな・・・・・・・・

この子と友達にならなければ

あたしは、殺人鬼にはならなかった。

ミーウェイ＝木村未兎編　第四部

意味の無い正義感なんか、振りかざさないほうがマシ。
あの日から、由香里はきっとつらい思いをし続けていただろう・・・

「おっはよ～由香里！美術の宿題や・・・った・・・」
次の日、あたしは登校した。由香里と一緒に。
「おはよ！どしたの？美術の宿題ならやったよっ」
「ち・・違う違う！ちょっとこっちきて！！」
その子は、由香里を引っ張って、ベランダまで連れて行った。
あたしは別に気にすることも無く、自分の席に座った。

「あんた、なんであんなヤバイのと一緒にいるのよ！」
「え？未兎のこと？やばくなんかないけど？」
「呼び捨て！？あんた・・・自殺行為だよ！それ！自殺してるようなもんだよ」

いきなり、由香里の大きな声が、あたしの耳に入ってきた。
寝耳に水とはこのことだと思う。
「未兎はこわくないもん！ほんとは優しいんだよ！」

それから、由香里は、前いた班から、ハミゴにされた。
「だから・・もうあたしといるのやめたら？
あんた、これ以上嫌われたくないでしょ」
由香里は、首を横に振るばかりだった。
「わがまま言ってごめん。でも、やだ。私、未兎といたい」

あたしは、なんとなく知ってたんだ。
この子とは、もう会えないだろうって

案の定、彼女は、翌日から、家から出してもらえなくなった。
そして、あたしに助けを求めて、電話してきた。

彼女は、泣いてた。

「未兎・・？私ね・・家から出してもらえなくなっちゃった・・・
ひくっ」
「ほーら言わんこっちゃ無い。だからやめろっていったじゃん」

「あのね、わたし、殺されちゃうかも・・・」
あたしはめちゃめちゃ驚いた。
「殺されるって！？どういうこと！？」
「お母さんが、決まりを守れない奴は
殺してやるって、息をまいてて・・」
意味不明。
決まり？

「佐藤家は・・・・がらの悪い子と、一緒にいちゃいけないの
お姉さんも、弟も、そうしてきたの。私一人破って・・
でも私、未兎のこと、柄悪いなんて思ってないからね！
未兎は、私の大好きな友達なのに・・・なのに！！」

あたしは愕然とした。
そして、怒りがこみ上げた。
それ如きで、彼女の自由を奪うのか
確かにウザったいと思ったこともある
でも、あたしがなにより心配したのは

彼女が嫌われないかどうかってことなんだ。
嬉しかった、ほんとは、学校で友達が出来たから・・・・・

由香里の親を、殺してやる・・・・

あたしは、金属バットを持って、家をでた。

ミーウェイ＝木村未兎編　第五部（前書き）

グロテスクシーン有
御注意。

ミーウェイ＝木村未兎編　第五部

あたしは、その日はじめて、ヒトを殺した。

「お母さん！私を家から出してよ！未兎を悪く言わないで！」
「だめよ、由香里。あなたはこの家でも一番期待しているの」
由香里は、泣きながら部屋をでた。
待っていたのは、姉と弟。それと、この家に代々仕えている執事。
「由香里。お母さんの言うことも分かってあげなよ
あれはあれで、あんたの事が心配なのよ」
「お姉ちゃん。大丈夫？泣かないで。僕、お姉ちゃんの泣いてるとこ見たくないよ」
「お嬢様・・・」

あたしは、ただひたすら、由香里の家を目指して歩いた。
それが、あんな事になるなんて・・・

あたしは、暗闇の中から未兎の家を覗いた。
でっかい家だった。大半の部屋に電気がついていない。
きっと、女中とかメイドとかいるんだろう。
なんてことを思いながら、窓を睨みつけていた。
すると、窓にびちゃっと液体がついた。
あたしはびっくりした。
由香里の母がヒステリーでも起こしているんじゃないのかと思った。
でも、違った。
窓に人の形らしきものが当たって、ずるっと床に張り付いた。
間違いない・・・・・・

殺人事件が起こっている。

あたしは随分と長い時間、その場から動けなかった。
もう4・5歩歩けば、由香里の家なのに、その茂みから動けなかった。
（なんで・・なんで誰もこの騒ぎに気づかないの！？）
よく見ると、周りに家がなかった。
それほど金持ちだったのか。

「やめてぇぇーーーっ！」
その声で、はっと我に返ったあたしは、走って家の中に飛び込んだ。
「由香里！だいじょ・・・！？！？」
入った瞬間にしたのは、大量の血の臭い。
目に飛び込んできたのは鮮やかな赤。
人の形を成していない、死体。
その真ん中に立っていたのは

由香里だった。

「・・未兎・・。来てくれたんだ・・・。ありがとう
でも、皆殺しちゃった。これで、私は自由だよ・・・」
「由香里・・・・！！」
「ねぇ、未兎。2人で生きていこうよ。自由に。好きなように。
私も分かったよ。束縛される苦しさが・・・・」
ぺた、ぺた、とあたしのほうに、由香里は近づいてくる。
あたしは、いきなり全身を恐怖感で包み込まれてしまった。
そして、逃げるように二階へ走った。

たくさん部屋があった。
走りながら、逃げ込む部屋を探した。
「未兎、待ってよ。私、未兎を殺す気なんてないよ？」
「ひぃっ！ち・・近寄らないで！人殺しィィィィ！！」
「ひど～い。未兎。傷ついたよ・・・・・」

あたしは、一つの部屋に駆け込んだ。
幸運なことに、金属バットはまだ持っていた。
一呼吸おいて、あたりを見回すと、そこは
由香里の姉の部屋のようだった。
机の上にノートがあって、名前に「佐藤亜香莉」と書いてあった。
難しい名前。きっと「あかり」って読むんだろう。
悪いとは思ったけど、ノートを開いた。
日記だった。

「今日も、由香里とお母さんは喧嘩した。
由香里の泣き叫ぶ声と、お母さんのヒステリックな声が混ざっている。
悲しい。有紀も泣くまいと、耳を塞いでいる。
やめてほしい。なにもかも終わればいい。」
次のページを開くと、花や星がたくさん書かれていた。
「今日、由香里に友達ができたそうだ。名前は未兎ちゃん。
昨日泣いていたあの子が嘘みたいだ。でも、また喧嘩した。
帰って来るのが１０時を過ぎていたから。由香里は平気そうだったけど
由香里。未兎ちゃんといつかあわせてね！」

あたしは、由香里以上に傷ついている人もいるのだと
涙をつたわせながら日記を読んだ。

最後のページにさしかかろうとした時・・
ドン！ドン！と部屋の向こうから音がした。
「未兎。ここにいるでしょ。早くあけてよ」
あたしは恐怖感が混じったが、かまわず日記を読んだ。
最後は、遺書だった。

「由香里は私たちを殺している。
もうすぐ私の番だろう。
だから、私が死んだら、これを未兎ちゃんに渡してほしい。
未兎ちゃん。由香里を攻めないで。
あの子は、可哀想な子だから。
あぁ、部屋の戸が叩かれてる。
私、どうやって死んじゃうのかな。
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！
由香里はあんな子じゃなかったのに」

最後のページには、涙のあとがたくさんあった。
バン！！部屋の戸が開いた。
「未兎見っけ。さ、行こ」
あたしは、バットをもったまま、由香里の後を付いていった。
あの日記は、あたしがあのページだけ破って持っていった。

「星空がきれい・・・。私、こんな遅くに外出たの初めてよ・・・」
林の中を、踊るようにして由香里が歩いた。
にたっと笑う。
怖い
寄るな
近づくな

汚い
殺される
いろんな思いがあたしを駆け巡った。

コロセ

あたしは、自分の命令に、素直に従った。

「由香里。ゴメン」
ドカッ！バットが由香里の頭部に直撃した。
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「死ね！死ねぇぇぇぇ！消えろ！嫌だ！あああああ！！」

数分後、自分の目の前に広がったのは
汚い血。
友の死体。

あたしは、友達を
この手で
死ねと叫びながら

殺してしまった・・・・・・・・・

ミーウェイ＝木村未兎編　第六部

「あ・・・・あああああ！！！」
由香里の死体はピクリとも動かない。
「いやあああああぁぁぁ！！」
あたしはその場から走り出した。
由香里の家から逆方向に。

街中に入ると、自分自身が揉み消されてしまいそうな
人だかりがあった。
あたしは、幻覚に陥った。
人が皆、由香里に見えてくる。
頭や腹からどろどろと血を垂れ流して
包丁をもって、あたしをにやけた目で見てくる。
「あ・・・・ああ・・っ・・あっ・・うぅぅっ・・」
「ちょっと！未兎じゃん！ナニしてんのぉ？大丈夫ぅ？」

顔を上げると、サークルの仲間達があたしを見下ろしていた。
「みんな・・・・紗枝チャン・・・」
「未兎、あんた裸足じゃん？どしたのよ。あんな路地から出てくる
しさぁ」
すると、一人の子が声を上げた。
「なんか・・・血臭くね？」
そしたら、皆があたしのほうに寄ってきた。
「わ！ほんとだぁ。血っぽい臭いする～」
「未兎ぅ。あんた殺人でもしたァ？シャレになんねーよぉ？」
きゃははは！それはないでしょーという声があちこちから上がる。
あたしは無性にその辺に落ちていた釘を拾った。

グサッ！

その辺に居たやつの肩にその釘をねじ込んだ。

「いやあああああ！！未兎っ・・なにしてんの・・・っ」

「人殺し！きゃあああぁぁ！！」

そこら辺に皆の声が響く。

泣き叫ぶ声。狂ったように叫ぶ声。呆然とあたしを見つめる目。うめき声。

あたしはがむしゃらに走った。

走って走って走って走り続けた。

ドン。

誰かにぶつかった。

「ってー！誰だよ！ちゃんと前向いて歩け！」

「なによ！あんただってぶつかってきたくせに！偉そうな口利くな！」

あたしは顔をあげてそいつを睨みつけた。

栗色のハリ頭に、白のパーカー、ジーパン。

こいつは、のちのコウヤ。

「うるせー女だな！おめーがわりーに決まってんだろ！」

「なんであたしなのよ！どっちもどっちで走ってたからお相子でしょ！？」

コウヤはクスクス笑った。

「な・・・なによぉ！」

「べっつに～。面白い奴だな、お前」

「そんなこと無いもん！」

「俺、高野瑞貴。お前は？」
あたしはむくれ顔で言った。
「あたしは・・・木村未兎」
「ふぅん。変な名前」
「変じゃないもん！！」
いきなり、瑞貴があたしの手を引っ張って、ずんずん歩き出した。
「ちょ・・！どこ行くの！？」
瑞貴はあたしをじろじろ見て言葉をはいた。
「きったねー服！顔とか血ばっか！おめーそれじゃ目立つぞ。
だから服とか貸してやるからこい」
あたしは、ちょっとびびった。
「なによ。あたしは犯罪者よ？しかも初対面のあたしに
服貸すだなんて・・・あたしを使って何がしたいの？」
瑞貴は苦笑した。
「なんでかって・・！？」

「俺も、お前と同じで犯罪者だし」

ミーウェイ＝木村未兎編　第七部

正直言って、びびった。
今、あたしの手を掴んでいるのが、あたしと同じ犯罪者だなんて・・・
・

「えーと・・もうめんどくせーからズボンでいいだろ。
風呂も貸してやったし、文句言うなよ」
「貸してやったって・・・あたし貸してなんて頼んでないもん」
風呂のガラス越しにあたし達は喋った。
外からは救急車の音と、パトカーの音。
きっとあたしを探しているはず。
「ここからそう遠くないからな。
お前を探してるんだろ」
「うん。多分ね」
「お前、怖くないのか？」
「うん。全然。後、あたしはお前じゃなくて、未兎って
名前がちゃんとあるの」

風呂の湯を手で掬ってぽたぽた落とした。
連想するのは、血。
そういえば、由香里の遺体は発見されたのかな。
今はもう、死体なんて怖くない。
ゆういつ怖いのは、生きているあたしと、その周りの人間。
きっと、サークルの　仲間が通報して、警察で取り調べ受けて
あたしのコトぜーんぶ話しちゃうんだろうな。

瑞貴は怖くない。
同じ犯罪者だから。

「おーい。なんか一人でしんみりしてるところ悪いんだけど
もう水風呂になりかけてるんじゃねーの？」
「え？あ、冷たっ！水だぁ！きゃぁ！」
「バーカ」
「うるさい！」

「で、これからどうするよ」
あたしは、貸してもらった布団の上で、瑞貴が発した言葉を返そうと
頭の中で言葉を探した。
「ん～・・。どーしよっかな。
ずっとココにも居られないし、家にも帰れないし、
あー、困ったわ。どーしよ」
「全然困ってる様にみえねーんだけど」
あたし達は、ぼーっと考え込んだ。
でも、あたしの考えてることは
これからの事じゃなくて、
「お腹すいたなー」とか、「コンビニ行こうかなー」とか
「カラオケ行きたいな。マンガも読みたい」とかの
くだらない事ばっかり。

「思いついた！おい未兎！思いついたぞ！」
「え？何が？明日の朝ごはん？」
瑞貴がぶすっとした顔であたしを睨みつけた。
「ちげーよ。これからお前がどう生活するかのコト！」
「あ・・あぁ、それね。で、どーなったの？
できるだけマンガ読めて、ご飯がたくさん食べられるとこがいいな」
瑞貴があきれた顔であたしを見た。
確実にレベルが下に見られていたので、あたしも瑞貴を睨んだ。

「俺の友達が経営しているカフェに来い。
明日明後日から、俺もそこに移住しようと思ってる。
だから一緒に来い。ついでに、カフェは手伝ってもらうから」
「えー。寝床が見つかったのはいいけどめんどくさい～」
「文句言うな、ボケ」
「うっさい、カス」
あたしがそっぽを向くと、瑞貴はイライラした表情を見せた。
「このワガママ女。人の世話になっておきながら・・・」
あたしはその表情を見て、クスリと内面で笑った。

あたし達は午前3時という早朝に起き、
のろのろと身支度を始めた。
「こんな早く起きたのはじめてだ～。
眠い～」
「朝方になったらサツが家の周りに来るからな」
あたしの目はがばっと覚めた。
「えええ!?困る!あたしきっと死刑だよ～」
「俺も捕まったら死刑だろうな。つーかお前、昨日の冷静さが消え
失せたぞ。
俺は指名手配犯になってるからな。そのうちお前もそうなるよ」

バタン。
ガチャン。
家のドアと鍵を閉め、あたし達は近くのカフェへと向かった。
外は以外にも寒かった。
あたりは闇だった。
その中で、あのカフェは赤々と輝いていた。
「あそこだよ。あのカフェ」
「ふ～ん」

カラン・・・・・
中は普通のカフェっぽかったが、客が一人もいない。
そりゃそうか。午前3時ったら朝って言うかまだ夜だしね。
「瑞貴～。やっぱこっち来ることに決めたんだ？
あ、女の子なんか連れてきちゃって。こんにちは」
あたしはぼぅっと店内を見ていたので、びっくりして頭を下げた。
「こ・・こんにちわ！」
そのとたん、頭をテーブルにぶつけた。
「きゃあ！痛い～～っ！！」
「ばーかばーか」
「馬鹿じゃないもん！！」
（いつか見返してやるんだから！）

こんな生活でもいいな、と
あたしは、思っていた。

ミーウェイ＝木村未兎編　第八部

あたしは、カフェで、住み込みのバイトをはじめた。
バイトって言っても、給料は無いし、来るのは怪しい人ばっかり。
だからあたしは（中一ってコトもあって）厨房のほうに居た。
瑞貴は中一なのに高校生くらいに見えるから、接客をしていた。
で、瑞貴の友達って言うのが、高校3年生らしい。
元やくざだったか暴走族だった、っていう話を聞いたような聞かなかったような。
「未兎ー。休んでいいぞー」
「へーい」
あたしは和室に転がり込むと、窓際に居た瑞貴に声をかけた。
「瑞貴も犯罪者なんだよね。誰殺したの」
瑞貴は目を丸くしてあたしを見た。そしてまた窓を向き、曖昧に答えた。
「・・センコーみたいなやつ」
瑞貴は悲しそうな目で、外を見た。
「いい先生だった。皆に好かれてた。俺も気に入ってた。
でも、裏切ったんだ。裏切られた。悲しかった」
あたしは言葉をかけれずに、静かに聞いてた。
「人って汚いよな。醜い。金で全部動くし。
俺みたいに殺しが楽しいって思う奴らもいる。
でも、仕方ないんだろうな」

あたしは動揺しなかった。
そう、人は汚いし醜い。
今更分かりきったこと。

「友達は、俺が殺人してるって知らないから、黙っててくれ」

弱いなぁ。
「分かったよ。別に言う気も起きないしね」
あたしは、コートをかぶって外に出た。寒かった。
あたしのかぶってたコートは、由香里を殺した日に着てたコートだから
血の臭いがぐわんぐわんするけど、気にしなかった。
あの時由香里を殺さなかったら
きっと、あたしは由香里に殺されてた。
狂って、狂って、踊りながら倒れていくような
そんな死に方はしたくない。
なにがあっても生きなきゃ。

近くの電気屋さんに目をやると、ニュースを報道していた。
それは、昨日の夜、世田谷で１５・６の女の子が
釘で刺されたというニュースだった。
つまり、あたしが起こした事件。
ついでにもう一つ報道していたのが
１３歳の女の子の死体が、高級住宅外の路地で発見されたとのコト。
女の子の名前は・・・・・佐藤由香里。
背中に寒気が襲ってきた。
血の臭いが、自分の惨めさが戻ってくる。
なにを怖がっているんだ。
恐れることは何も無い。
「行方不明の少女は、指名手配中です」

最後の一言を聞いたときはビクンとした。
よく見れば、周りを通っている人皆が、自分を避けている。
こんなところに居てはいけない！
早く部屋に戻らなきゃ・・・。

「あなた、ヒト、殺したでしょ」
いきなり自分の視界に、人が入ってきた。

「瑞貴ー。お客さんだよー」

アメとあったのも、アンナとあったのもこの日。
この日は、あたしの、運命の日。

コウヤ＝高野瑞貴編　第一部

東京都内の中学校。
ここで、俺は、最高の学校生活を送っていた。
「瑞貴ー！部活行こうぜ！」
「分かったー！ちょっと待っててくれー」
俺は、高野瑞貴。出席番号は・・８か９か１０くらいだったような気がする。
記憶力は悪いほうだから、もう２学期だってのに、クラスメイト全員の名前すら覚えていない。
「こらぁ！高野くん！まだ全部宿題出せてないでしょ！
今日と言う今日は、溜め込んでいるモノ全部！吐き出してもらうからね！」
今大声で怒鳴ったのが、担任の岡田先生。
俺には優しくないが、優しいというコトで大人気の先生だ。
「えー。わかったよ」
といいながら、吐くまねをすると、後ろからゴツンと殴られた。
「ってぇ！！」
「馬鹿なことするんじゃねーよ！とっとと宿題だしゃいーだろーが！
ついでに廊下で騒ぐんじゃねえ！」
クラスメイトの前坂亜里沙に怒鳴られた。
女のくせに乱暴&暴言はき。怖い。
「なんか言ったか？」
「いいえ。何も」
おまけに地獄耳。

で、亜里沙のおかげで、俺は宿題をするはめになって
サッカーがお預けとなった。

「はい。お疲れ様」
サッカーのことばっかり考えてたら、いつの間にか終わってた。
部活も終わってた。
「あー、部活出れなかった！」
「明日、ちゃんと宿題してきたら、部活いってもいいよ」
「マジで！やったー！」
叫びながら教室を出ると、なぜか亜里沙がいた。
「どーしたんだよ。前坂」
亜里沙は、顔をあげると、真っ赤になって言い訳した。
「え！？っと・・あの、忘れ物して、で、戻ってきて
高野のコト待ってたんじゃないよ！」
「そりゃそーだろ。なんでお前が俺を待つんだよ」
そう言ったとき、前坂はめちゃめちゃ悲しそうな顔をした。
「！？」
「もういい！帰る！校門の前で有村待ってたぞ！！ボケ！」
それだけ言い残すと、階段を風のように駆け下りた。

「遅かったな。岡田先生、お前には厳しいもんな」
「おまたせ。で、お前ずぅーっとココに居たの？」
有村啓吾は不思議そうな顔をした。
「そうだけど」
「で、その間、前坂ココ通った？」
「前坂ぁ？見てないけど」
「じゃ、いいや。ありがと」
「そういや、今日、練習試合だったぞ」
「えええ！？くっそー！やりたかったなぁ・・・・」
この、学校生活が、俺は一番好きだった。

コウヤ＝高野瑞貴編　第二部

学校が一番好きだったから、家に帰るのが憂鬱だった。
家にいるのは、ヒステリックな母と、無口な父と、
ゆういつ優しいのは、姉だった。
「お帰りぃ！瑞貴！どーぉ？部活やらせてくれた？」
「ううん。ダメ。ねーちゃんはいいよな。美術部だし、楽だし」
姉の、高野瑞華は美術部に入っていて、たくさん絵の賞をもらっていた。
「じゃぁ、美術部はいれば？今ちょーど部員募集中！さー！そこのお兄さん！入った入った！」
「冗談じゃねぇ！絵ェかくなんてやなこった！」
笑いながら、姉は夕食を作っている。母も父も夜遅く帰ってきて朝早く出て行く。
母の料理なんて、年に指折りで数えられるほどしか食べない。
まぁそのほうが楽でいいけど。

「ねー、どうしていつも部活できないのさ？」
夕食を食べているとき、いきなり姉が切り出してきた。
「え！？」
「どうしていつも部活できないの？ねぇチャンに全部はいてみな」
「・・・やだ！・・・」
姉はにかりと笑った。
「ま、知ってるけど～」
「な！？」
「宿題してないんでしょ。亜里沙チャンが言ってたよ～ん。
あの子いい子ね。ソフトボールしてるけど。美術入ればいいのに」
あのアマ～！！と、内心ぼやきながら、俺は味噌汁を飲み込んだ。
でも、何で亜里沙が言うのか分からない。

「あーゆー子、美術部にほしぃなぁ・・っ！」
ご飯を片手に、姉は夢を語っていた。
俺は、食べ終わった皿を適当に水の中に放りこんだ。
「ちょっと！後片付け大変なのよっ！ちょっと！？きいてるっ！こらぁ！」
「へいへーい。ごちそーさま」
適当に返事をして、内心うっとおしいと思いながら、階段をのぼる。
まだ、下のほうからわんわん喚く声が聞こえる。

コノ声が、もうすぐ聞けなくなるなんて、思ってなかった。

朝、俺は母の濁声で起きた。最悪の朝だ。
無口な父は、俺と姉が「いってらっしゃい」と言っても返事を返さず
朝から機嫌の悪かった母は、不倫相手の恋人がくるなり
「いらっしゃいっ」とニコニコ笑って、父が出て行った１０分後に
軽い足取りで出て行った。
「世の中終わりね。腐ってる」
「ふつー子供の前で不倫相手といちゃつくか？ふつー」
「まーねぇ・・・。ん？きゃぁ！大変！学校遅刻！早く早くあんたも急いでよ！」

姉と笑い転げながら、坂道を自転車で駆け下りる。
そんな毎日も、今日で終わり・・・・・・・・・・・・・・・。

コウヤ＝高野瑞貴編　第三部（前書き）

グロテスクシーンあります。

コウヤ＝高野瑞貴編　第三部

「おはよっ！」
「おっはよ！瑞貴」

今日は嫌な予感がした。
なぜだか嫌な予感がした。
しかも、災いが降りかかるのは、
俺じゃなくて、姉のような気がした。

「高野くん。宿題してきた？」
「へい。してきやした」
いつもみたいにふざけて、皆が笑って、先生が苦笑して、
それが一番いいと思っていた。
なのに、神様は、俺からそれを奪い取って言った。
「お前に楽園などひつようない」

昼休み。ぼけっと考え込んでいる俺のところに、啓吾がやってきた。
「瑞貴ー。お前のねぇちゃんって、けっこう優等生だよな」
「しらねー」
「前の中間は？」
「３位」
「じゃ、すげーんだ。あのな、お前のねぇちゃん、岡田センセと
理科室にいたんだけど。怒られてんのかな・・・・？」
俺は眉をひそめた。
「ねーちゃんがどこにいようが関係ねーよ。なんだよお前、
シスコンって言いてぇのか？」
「ちげーよ！お前、今日変だぞ！カリカリしててさー」

そうだ。何かがおかしい。狂ってる？
悪いのは俺じゃない。じゃぁ誰だ？
そうか、姉が、ねぇちゃんが・・・・・・・・・・

ねぇちゃんが・・・危ない・・・？

俺の直感は嫌というほどあたる。
授業を知らせるチャイムがなったとたん
それを引き金のようにして、走り出した。
「お・・おい！授業始まるぞ！？」

「ねぇちゃん！」
勢いよく理科室の戸をあけた。
昼間なのに、黒いカーテンを閉め切っていて、中は何も見えない。
「ねぇちゃん！」
「瑞・・・貴・・・？」
闇の中から、白くて細い腕が伸びてきた。
手首には、赤と白のミサンガをしていた。間違いなく姉の腕だ。
その腕が、俺を抱きしめる。
「ねぇちゃ・・・・」
そのとたん、液体が俺の頭に落ちてきた。
生臭くて、生ぬるくて、どろどろした、赤い液体。
「ねぇちゃん！血が・・・・！？」
そう言い放って前をむくと
姉は、死んでいた。
ぐちゃぐちゃに割れた頭を、俺の肩にのせて、
白い腕は赤く染まって、俺の腰に結びついたままだった。
「あ・・ああ・・うぁ・・っ！」

「高野くん？どうしてこんなトコロに居るのかしら？」

「せんせ・・・・」
俺の目線の先には、口元が大きくつり上がっている
鬼のような先生がいた。
「せんせ・・が、ねぇちゃん・・を・・・・・？」
「そうよ」
「ど・・・・・して・・・・？」
「ムカつくの。その子。ちょっと頭いいからって。
世間ではでしゃばりって言うかな。とにかく、私にとって邪魔だった。だから消した。
殺した。ハイ、なにか文句でもあるの？生徒が先生にたてつくの？
あんたも消すわよ」
呆然としている心の中に、赤くて黒いものがこみ上げてきた。
憎い。あんなに好きだった姉を殺したこの女が憎い。

ーーーーーーーーーーーっ！！

俺の目の前にあるのは、汚い血の海。
２つの死体。
そうだ、俺は、人殺しをした。
でも、俺は悪くない。
なにもかも、この女が悪いんだ。

「あ・・あ・・・あぁぁぁぁぁぁ！！うわぁぁぁぁぁ！」

どうして、神様はこうも残酷なのだろう。

コウヤ＝高野瑞貴編　第四部

微かな足音が、怖い。

「おーい！瑞貴！授業終わったぞ！くっそー。あのサボり魔、どこにいやがんだ・・」

大きな啓吾の声と、足音が、理科室の近くの廊下に響く。

「みーずーきーっ！！！」

俺の肩がびくんと震えた。

「いたいた！全く、探すこっちの身にもなれってんだ。じゃ、かえろーぜ。みず・・・・」

啓吾の声が途中で止まる。息を呑む音が聞こえる。

「瑞貴・・・」

「啓吾・・？」

部屋の中は暗くて、中までは見えないだろうけれど、血なまぐささは健在してた。

「なにしてんだよ・・。そ、そういやねぇちゃんは？岡田センセもいねーじゃん・・？」

啓吾の声はかすかに震えていた。

「啓吾・・・」

「なんだ・・よ？」

「俺、もう帰る」

「え。気分でもワリィのか？だったら保健室でも行ったほうが・・」

「帰る！！！」

俺は、大声で啓吾を怒鳴ってしまった。

「あ・・・わかったよ・センセには言っとく」

「・・・・・・」

俺は駆け出した。

いつまでもココに居たら、気が狂うんじゃないかとびくびくしてた。

後ろを向くと、まだ啓吾は心配そうにこっちを見ている。
「啓吾！」
啓吾の肩が震える。
「有難う！怒鳴って悪かった。さよなら！」
そこに残ったのは、唖然とした啓吾の表情だった。
「なんだ・・・？あいつ」
ふいと理科室のほうを向くと・・・
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
もう、ココにはいられない。
逃げなきゃ。逃げなきゃ。
耳には、啓吾の叫び声。

コウヤ＝高野瑞貴編　第五部

周りにいる他人皆が、俺を睨みつけているようだ。

「はぁ・・・はぁっ・・！」

家に帰ると、当たり前だが誰もいなかった。

俺は一息ついて、２階へ走り出した。

２階には、俺と、姉の部屋がある。

「悪くない・・・。俺は・・悪くない・・・」

弱いなぁ。誰かが囁く。自分でも分かる。

中くらいのリュックサックに、衣類とお金を全て押し込んだ。

そして、部屋を出た。

目に映ったのは、姉の部屋。

「入っちゃダメーーっ！」と言われているので

いつもは入らないでいた。

キィ。

古いような新しいようなドアが音を立てた。

「こんな・・部屋だったっけ・・」

いつのまにか、姉の部屋はマンガのキャラクターで彩られていた。

「この絵は、ねぇちゃん自分で書いたんだろーな・・・」

全然目立たないようなところに、ちょこんとおいてある額縁の絵。

そこには

俺が通う中学校の制服に身を包んだ少女と

その横で恥ずかしそうにしている学ランの少年があった。

「これ・・・・」

中学に入りたての入学式の日。
俺は、「撮らせないと殴る」と脅されて
姉に写真を撮られた。で、
そのあと二人で撮った写真がある。
きっとこれは、それをまねたもの。

「ねぇちゃん・・・」

机の上にあった写真たてにあった写真を
俺は鞄の中へ突っ込んだ。

それは、あの時の写真だとも知らずに。

警察が来たので、裏口から飛び降りるようにして逃げた。

このまま、見つかりませんように・・・・・・

コウヤ＝高野瑞貴編　第六部

俺は、ひたすら歩いた。
別に、当てがあるわけではないが。

カランカラン・・・。
俺はどこかのカフェに入った。
今は満席です、といわれて仕方なく相席になった。
「今日は。君、一人なの」
「そうですけど」
カクンと首を揺らして頷いた。嘘を言っているわけでもないし。
「家出？」
「・・・。プライバシーの無い人ですね」
目の前にいた高校生くらいの人はケタケタ笑い出した。
「面白い事言うね。でも、悪乗りの家出なら止めてとっとと帰ったほうが身のためだよ」
「だって、俺には帰るところがない」
その人は目を丸くした。
「どうして」
「訳は言えない。お兄さんきっと嫌な思いするよ」

「君、名前は」
「俺？高野瑞貴」
「じゃ、俺が君を拾ってあげるよ。俺は相模リュウ」
「は？いいよ。そんな迷惑なこと」
「いいって。俺の経営してるカフェが、あ、それはココの事ね。店員足りないから、働いてよ」
俺は何故か働かされることになった。
「経営？」

「そ。すげーだろ」
「はぁ・・・」

俺は、何も知らない親切な、相模さんのお世話になることになった。

「寝るところは、向かいのアパート貸してあげる。
３０３だからな。間違えるなよ～っ」
「はぃ。ほんとに有難う」
「へいへぇい。どーいたしまぁ～して」

アパートの部屋は以外に綺麗だった。
「気に入らなかったらカフェの裏室に引越ししてもいいから」
と言われていたので、荷物を全部整頓するような事はしなかった。

今日は何も無いので、買出しに出た。
特に食べたいものなんて無かったけど、もう外に出られないかもしれないし。

ドンッ。誰かとぶつかった。

それが、今のミーウェイ、木村未兎だった。

コウヤ＝高野瑞貴編　第七部

未兎にあった後、立て続けに亜魅・杏奈にあった。
亜魅は、口の悪いクソガキ。杏奈は上品ぶった子供にしか見えなかった。
後、なんで女ばっかりなんだろう。

そいつらのおかげで、また仲間が出来たけど・・・・・・・・・。

今は、人を殺すのに躊躇いが無い。自分でも、その事に身震いするくらい。
あの時、姉の部屋からひったくって来たあの写真は
一度たりとも視界に入れていない。
自分の犯した罪を、また見なければいけないから。
自分の罪を見て、目尻が焼けるように熱くなり
目玉や胸に熱い熱い針が、一本なのにグサグサと刺さるような感覚が
自分を容赦なくガリガリと引っ掻くように襲う。
逃げてるみたい。いや、逃げてる。
でも、それでいい。
このままの自分が保てるのなら
これで、なにも悪いことは無い。

「コウヤーァ。机に突っ伏して寝るなよー。こらぁー」
ミーウェイの声にはっとする。
「みぅ・・じゃない、な。っと・・・・・ミーウェイ？」
「そーだよ。あたし以外に誰がいるってゆーのさ！
もしかしてアンタ、あたしの名前まだ覚えてないのぉ！？」

今現在の自分は、「高野瑞貴」ではなく「コウヤ」だ。
もう「高野瑞貴」という弱い人間は、この世界に、この世に存在しない。
今は強くて、何事も屈しない、「コウヤ」だ。

それでもいい。
それでいい。
それが一番いい方法なんだ。

弱い自分を、見なくてすむから。
姉の笑顔を、見なくてすむから・・・・・・・・・・。

アンナ＝楠杏奈編　第一部

「杏奈お嬢様。学校へ行くしたくはできましたか？」
「きゃぁー！杏奈様よ！」
「さすが、我が校トップクラスの成績優秀才女！」
こんな言葉が、毎日私を取り巻く。
そんな私が、ただ一つ大好きな言葉。

「杏奈の嘘つき！！」

そう、私は嘘つきの詐欺師。
みんなを騙すことがただ一つの楽しみ。
まぁ、みんな私のジョークとしか思っていないけれどね。

私の名前は楠杏奈。この聖アルプス学園で、この名前を知らない人はいない。
生まれは超大貴族。成績もいい・・って、自慢してるみたいね。
今の歳じゃ中学生だけど、高等部まで噂は広がるくらいの有名人。
友達も・・たくさんいる。
友達みたいな友達は一人もいないけどね。
みんな目立ちたいから、私と一緒にいるだけ。
そんな奴らの存在がムカついて、少し苛めてやるの。
○○君があなたを呼んでるわ、とか言って
裏庭に呼び出して、「嘘に決まってるじゃない」って蹴落としたり。
まぁ、そんなんじゃめげてくれないけど、
「嘘つき！」って、気の強い子は言ってくれる。
だけど、たいていの子は
「なぁんだ。そーだったの。騙されちゃった。あはははっ！」
って笑ってばっかり、面白くない。

「杏奈。おはよー」
「杏奈さん。おはよう」
会う人みんなが、私に声をかけてくれる。
うっとおしいけど。

「杏奈っ！」
がばっと音がして、背中が重くなった。
振り返ると、ふわふわのパーマがかかった栗色の髪が
顔にばっさとかかる。
「・・・恵美？」
「そーよぉ。恵美よ！おはよーっ！」
「・・おはよう」

木下恵美（キノシタエミ）。楠財閥には劣るけど、なかなかの金持ち企業。
自分も上位の人間だ、みたいなアピールを続けている。
まぁ、私のそばにいれば大抵そう思うらしい。
この頃は、上級生までが取り巻きになってきた。

「見て。杏奈様と恵美様よ。何度見ても素敵ね。背がちっちゃくて
可愛い・・っ！」
「ほんと。とうてい私たちなんかには届かない存在ね」
下級生が私たちをじーっと見つめる。
みんなの視線がぷすぷすと刺さる。
気分が悪い。

「ね？麗（レイ）もそう思わない？」
「・・・ばっかみたい。私、他人にきょーみないの」
冷たい声が私の耳に刺さった。

くるりと振り向くと、自分より下級なのに、自分より背の大きな黒髪の長い女の子が、友達と歩いていた。
「えー。またそれー？麗ってば、そんなんじゃ杏奈様に苛められちゃうよ」
「いいわよ。別に。あんなの、取り巻きがいなきゃ大したことないわ」
ごもっともだわ。
「ねーぇ。杏奈。ちょっとあの子、ウザくない？ちょっといじめてやろーよ」
「遠慮するわ。後輩イジメってサイテーよ」
「そーかなぁ・・・」

それに、むしろああ言うタイプ、スキだから。
思ったことをズバズバ言えるタイプって大好き。

あの子、面白いな。
今までつまらなかった学園生活に、新しい発見があった。

アンナ＝楠杏奈編　第二部

昼休み。
朝であったあの女の子を探してみる。
（下級生って事は・・・1年ね）

廊下をぱたぱた走っていると、何人かが私の横を通って
「ほんとだー。噂どおり背、ちっちゃいねぇ～」
と言ってきた。
どんな噂よ、と睨みつけたら、ビビって走ってどっか行っちゃったけど。

「ねぇ。そこの2人」
やっとの思いで、下級生を2人捕まえた。
それは、今日朝、あの女の子と一緒に登校していた子たちだった。
「は・・はい！なんでしょう・・杏奈様・・」
「様なんてつけなくていいわ。それより
黒髪で、背の高い・・たしか『麗』とかいう子、知ってるわよね？」
2人はびくっと体を震わせた。
「し・・ってます」
「その子のところに案内して頂戴」
「「あ・・あの」」
2人の声が重なった。
「「麗を苛めるんですか？それだったら・・案内は・・」」
「違うわ。苛めたりなんかしない。約束する！」
ほっとした笑顔で、2人は笑った。
「よかったぁ～」「だねっ！」

1―3。此処にいるらしい。
「ここ？」
「はい！麗ー！れーいー！ちょっと来てよぉーっ」
2人が手招きして麗を呼ぶ。
「何？何か用？」
手には文庫本。読書家なのね。
「あのね！杏奈さ・・先輩が、麗に用があるんだって！」
麗は怪訝そうに私を睨んだ。
「何か御用ですか？苛めにいらしたとか？」
「違いますー。ええっと・・本名教えて下さらない？」
「・・・鮎川麗・・」
鮎川・・どこかで聞いた名だわ。
「ね。鮎川麗さん。私とお友達にならない？」

「えええええー！？麗すごぉぉーい！」
2人が歓声を上げる。通りかかった人たちも目を丸くする。
小声で「イジメじゃない？」との声が聞こえた。
「なんでですか？」
「え？」
「貴方ほどの有名人。友達らしい人なら沢山いるでしょ。
では、本の続きが気になってるんで・・・」
去ろうとする麗の腕を掴み、引き止めた。
「ね？なってくれる？」
「・・・・」
麗は私をうっとおしそうに見下ろす形で、目を細めた。
「じゃ、仮の友達って事で・・」
「ほんと？ありがとぉっ！」
あんな面白い子を友達に入れれたなんて！

これから、もっと楽しくなりそう・・・。

アンナ＝楠杏奈編　第三部

「ちょっとぉ！杏奈ぁ！今朝の子に『友達になろ？』って言ったってホント！？」
それこそ、もう少し顔を近づければキスしそうなくらいの位置で恵美が叫んだ。
「ホント」
私はしれっと返した。
「私絶対反対！あの子、私の嫌いなタイプ！」
恵美はまだ怒っている。うるさい。
「いいじゃん。私の勝手で」
「杏奈ひどーい！」

周囲に人がいないことを確認して、私はこそっと呟いた。
「カモだよ。騙しの」
「・・・マジで」
恵美がにったりと笑った。私の詐欺を知ってるのは恵美だけ。
「ならいいや。許す」
・・・あんた何様よ。まぁ、これは恵美を黙らせる口実だけど。
「じゃ、帰るから」
「うん。じゃ、バイバイ」

学校のすぐそばにリムジンがあった。
「お帰りなさいませ。お疲れ様です。お嬢様」
私は何も言わずに車に乗った。

「ねぇ、じぃ。鮎川って財閥あったかしら？」
隣に座っていたじぃにふと聞いてみる。
「はい。ありますよ。楠財閥と同等くらいの大企業です」

「その鮎川に、麗って娘、いる？」
じぃは窓を開けて言った。白いひげが揺れた。
「はい。いますよ。一人娘の麗様。お父様にたいそう可愛がられているようで」
「ふぅーん」
ちっちゃな背中をクッションに押し付け、
恵美にどう言い訳するかを考えた。
「・・・・寒いわ。じぃ。閉めて頂戴」
「かしこまりました」
ウィーンと音を立てて窓が閉められた。

「えぇえ！？あいつ財閥娘！？」
「うん。しかも！一人っ子」
「あー・・終わったね」
「でしょ。計画取りやめ」
「じゃ、友達やめよー！ね？」
「昨日の今日じゃ無理」
「えー・・分かったよぉ」
「じゃ、バイバイ」
「んー、バァイ」

恵美の事は丸く収まった。
後は、明日どうあの子に接するか・・・・・・・・・

アンナ＝楠杏奈編　第四部

「おはよう。麗チャン」
朝、学校で麗に出くわした。
「・・・おはようございます」
麗は無愛想に返事した。恵美がじとーっと麗を見つめる。
「やーな感じー」
誰にも聞こえないように、恵美はぼそっと呟いた。

麗は私といるときも、どこか遠くを見つめていた。
そばにいるのにいないような、なんだか不思議な存在。
騙しようがなくて、私はちょっと退屈だった。

「ね、杏奈。騙しやめたの？」
「止めたわけじゃないけど・・・」
恵美はしつこく聞いてきた。
うっとうしいなぁ・・・。
「じゃ、何でやらないのさー！」
「だーかーらー！出来ないの！」
ぎゃんぎゃん喚く恵美がうっとうしくて
私は適当に言い訳した。
「そのうちやるよ。あんないいカモ見逃さない」
「前も同じようなこと言わなかったー？怪しいっ」
「ふざけないでよ！何であんたに嘘言わなきゃいけないのよ」
それ自体が嘘だけどね。

「・・・・・・」
この会話を麗が聞いているなんて
私はそのとき知る由も無かった。

「麗チャン。おっはよーぅ！」
次の日、麗は私を殺意のこもった目で睨んだ。
「ん？どしたの。機嫌悪いの？」
「えぇそうよ！あんたの所為でね！！！」
私はナニがなんだか分からなかった。
麗は涙目で睨んでくる。
「私は最高のカモだってね！ふざけんじゃないわよ！」

聞かれてた。
私の頭の中で回想が始まった。

「れ・・・麗！ちょっとどうしたのよ」
「うるさい！離して離して！私はコイツと話がしたいのよ！
私をただ利用しただけのこの最悪女にね！」
「ちょ・・・っ麗！」

気づけば周りが皆私を見ている。
白い目。
「最悪女！死んじゃぇ！」
麗が必死になって叫ぶ。
「いい加減にしな！先輩にその言い草は聞き捨てならないよ」
とりまきが私を囲む。
麗が何か叫んでいる。

あぁ、もう訳が分からない・・・・・。

アンナ＝楠杏奈編　第五部

気がついたら私は保健室のベットの上だった。
「杏奈！大丈夫！？痛いところとかない？」
心配そうに自分を覗き込む恵美がいた。
「だ・・・大丈夫」
「も～心配したよぅ！あ、麗って子はちゃぁんと叱っといたからさ！誤解も解けたよ！めでたしめでたし～」
楽しそうに笑う恵美を、虚ろな目で見ていた。
笑っていた恵美がようやく私に気づき、また心配そうな顔をした。
「今日は早退しよ。どうせこのままじゃ授業うけらんないよ」
「・・・・そうだね。そうする」
「私、電話してきてあげる！待っててね。
荷物もそこにあるからね～。動いちゃダメだよっ！」
ぱたぱたと恵美は出て行ってしまった。

（・・・・此処にいたくない・・・！）
急に背中に悪寒が走り、私は荷物をひっつかむと廊下に出た。
授業中なのか、だれもいない。
（よかった！）
私はそのまま、恵美のようにぱたぱたと走り出そうとした。
「待ってよ」
どこかで声がした。
くるりと振り向くと、気を失いかけた。
そこには
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
傷だらけで血をしたたらせた麗がいた。
（幻覚よ・・・！そうでしょ！？）
私は髪をぐぃと引っ張ってみた。痛かった。

「いまさら逃げるんだ？惜しいな。もっと早くこれたら」
「これたら・・・・？」

「あんたの喉を噛み千切ってやったのに」

私は怖いものにめっぽう弱い。
だから、そういう表現をする言葉も嫌い。
「あんたの喉が亡くなった後は、この爪であんたの眼球を引き裂いてやるよ！
その次は、腸を食いちぎってやる！！」
「やめてぇぇぇぇぇぇ！」

「杏奈！？」
「え・・・恵美」
恐怖で尻餅をついた私に駆け寄ってきたのは恵美だった。
「・・・！？麗っ！」
こくんこくんと涙目で私は頷いた。
「杏奈！こっち！逃げるよっ」
「恵美っ・・・待ってよぉお！」
私たちは駆け出した。
それまで何もしなかった麗は、いきなりぎろっと目をむき、鬼のような形相で追いかけてきた。

間違いない。間違いない。
あれは、人間じゃない。化け物だ。
「杏奈！ちゃんと走って」
「で・・・でもっ！他の子はどうなるの！？みんな死んじゃうかも・・・」
恵美はしっかりとした顔つきで、前をみた。
綺麗な目だった。

「大丈夫。みんなは『鮎川グループの姫が楠財閥の娘に喧嘩をけしかけた！』
ってしっぽ巻いて帰っちゃったから」
「み・・・みぃんな・・？」
「そ、みんな。さ、早く走って！」

（・・・どこよ。どこにいるの・・・必ず捕まえてやる！
すぐに殺してなんかあげない。いたぶって殺してやる）
麗はまた目を剥いて走り続けた。どこか悲しそうな目だった。
（ゆるさない・・・許さないんだから！）
あの言葉はよほど強く麗を傷つけてきたらしい。
そもそも、麗は小さな頃から「鮎川の姫」とよばれ
友達は高貴な人ばかりだった。
その中で、麗の父は「楠のお嬢さんとお友達になりなさい」と
昔から麗に言っていた。
そして、やっと会えたはいいが、声はかけられないし
かけられても逆に冷たくしてしまう。
明日こそは・・と思っていた矢先に
「カモ」とまで言われ
麗の心はズタズタに裂かれ、自分でもどうすればいいのか分からなかった。
父の期待にこたえてやりたい。
でも、仲良くなれない。

（ごめんね。父さん。ダメな娘でごめん・・・）
麗は、3階へ伝う階段を駆け上がった。

アンナ＝楠杏奈編　第六部

「ダメだよ！追いつかれちゃうよ！」
私と恵美は４階へ続く階段を上がっていった。
（なんなのよ・・・！早く家に帰りたいよぉ・・っ）
涙を浮べて今にもべそをかきそうな私の髪を、恵美はぽんっと撫でた。
「だいじょーうぶ！杏奈知らないの？私、陸上では県で一位だよ！」
（恵美・・・。あ・・そっか、恵美に引っ張られているから自由に動けないんだ）
私は親切でやってくれている恵美が、突然嫌な奴に見えた。
（そうだ！騙しは・・・私の得意分野だ・・・）
「ねぇ、恵美。二人でじゃなくて、これからは一人で行動しよう」
恵美の顔が青ざめた。
「隙をみて外に飛び出せばいいよ！」
「だ・・・ダメダメダメ！危なすぎる！」
「いいから！こうしないと二人とも死んじゃうっ」
そういって、私は四つ角になっている廊下の一角へ飛び出した。
恵美も、ここにいてはいけないと立ち上がって駆け出した。

（やった！成功！）

私は近くにあった窓から外の芝生へ身を投げ出した。
ちなみに此処は四階。腕の骨折くらいはした。
「助かっただけましだってーの！」
恵美はまだ校舎内をうろうろ走っているだろう。
助けに行く気はさらさら無いので、ここで鬼ごっこをリタイアさせ

てもらう。
（ごめーん、恵美。アンタのこと、どーだっていいのよ）
私はにやりと笑うと駆け出した。

「最低女。はっけーん」
窓から麗が身を乗り出して私を見下ろしてきた。
さっきまでとはキャラが違う。
「死刑、けって～い」
けらけら笑いながら麗は降りてきた。
芝生じゃなくて、アスファルトに着地。
（嘘・・・・！？）
「麗ちゃんはぁ、お前みたいなへぼと違うの～っ！」
麗は長い髪を振り乱して笑う。

作戦は失敗に終わった。

恵美はきっとまだ怯えながら校舎を歩いているだろう。
その恵美のほうが安全だとは！
私は気を失いかけた。
「死ねーーー！！」
麗は猛スピードで駆けて来る。
私はとっさに、その辺にあった鉄パイプでガードした。

ぐしゃぁあああ。
ぎゃぁあああああ！

麗は、鉄パイプに刺さったまま、死んだ。
よく見ると、鉄パイプは、空気圧かなにかで裂けていた。

「た・・・・たすかったぁ」

私はその場にへなへなと座り込み、麗を覗き込んだ。
（やっぱり綺麗・・・・美人だなぁ）
麗は、通常に戻ったようだった。いつもどおり綺麗だった。
（ゴメンね。麗ちゃん）

アンナ＝楠杏奈編　第七部

此処にいたら、麗を殺したって事で犯人にされて
警察送りにされてしまう。
父が手を打って警察を丸くおさめてくれたらいいんだけれど
その後が面倒だから、やっぱりやめよう。
この時、私は絶対に人殺しはしない、と誓った。

（こーなったら、逃げるしかないかなぁ・・・）
私は、家と反対方向の裏門から出て行った。

「はぁ・・・はぁ・・・・」
その頃、恵美はまだ走り回っていた。
（おかしいなぁ・・・。杏奈と別れてから麗がこない・・・。
外に出てみよう）
走り回って、もう一歩も動けない、という体で
恵美は階段を少しずつ下りた。
階段は、ちょうど中央の玄関に続いていて
真っ青な芝生がいつもどおりあった。
「杏奈、帰っちゃったのかな？私ももう帰ろうかな・・・。
つーか麗はどこよ！全く。怖いんだもん。私だって・・・」
ぶつぶつ呟きながら、恵美はくしゃりと芝生を踏んだ。

「え・・・・？」
なぜか靴下に赤い液体が。
「うそでしょ？嘘だよ」
血なまぐさい臭い。
「いやあああぁぁぁぁぁぁああああ！！！！」
目の前に、麗の惨殺死体があった。

恵美の通報で、すぐに警察が駆けつけ、杏奈は指名手配犯になった。
杏奈の両親は泣き崩れ、麗の両親も立っていられないほどだった。

「さーて、どうしよっかな」
杏奈はその頃、全然悪気なんかないような素振りで
夜の街をふらふらほっつき歩いていた。
「とにかく、このカッコじゃやばいよねぇ～」
今の杏奈の格好は制服姿。
しかも、下手をすれば小学生に見える。
「とにかく、どこかの人目につかないカフェに駆け込もう」

そう、あくまで冷静を装って。
誰も私が殺人犯なんてわからないように。

その策略も、同胞の前では効かなかった・・・・・・・

アンナ＝楠杏奈編　第八部

ピンクのカーディガンに淡い白のロングスカート。
それに似合わない黒のバレッタ。
という奇怪な格好をして
私は、カフェの中へ入った。

いきなり亜魅達が話しかけてきたときはすごくビックリして
しかも、詐欺や殺人まで言い当てられた時は、殺してやろうかと思った。
でも、仕方ないので適当に腹割って、
適当に言い逃れして
適当に仲間になってみた。

亜魅は、たまにウザイおかしな女の子。
未兎は、どこにでもいそうな強気な女の子。
瑞貴は、少し弱そうで気だけは強そうな男の子。
みんなの第一印象は良くも悪くも無く。
まぁ、こいつらだったら仲間になってもいいかな、くらい。

人の上にたって命令するのならいいんだけど
その逆はどうしても無理。
しかもその中心の子が
自分より、此処に居る誰よりも年下だって事が
一番気に食わない。

みんなの仲間になったふりをして

いつかみんなを欺いてやろう。
みんなはどんな顔をするだろう。
驚くだろうか。
泣き出すだろうか。
殺してやる、と襲い掛かってくるだろうか。
どんな結末が私を待っていようと
絶対に、生き延びてやる。

ついでに、この時点で一番危ないのは
亜魅だと、私は思っていた。
いつか何かしでかす。
とてつもない大きな事を
亜魅は仕出かすんじゃないか。
その事だけが気がかりだった。

この時の私の予想が、ピッタリ当てはまる日が来るのは
遠い遠い未来の話・・・・・・・・・・・

なにもかもが終わる（前書き）

これは「アメ＝遠藤亜魅編第六部」のつづきです。

なにもかもが終わる

物置小屋に、殺人犯が四人。
しかも全員未成年。
こんなおかしな事、他にあるんだろうか。

「おーい。言い出しっぺ。パソコンサイトなんて何の意味があるんだよ」
「それは私にも分からないのです」
コウヤがぶつぶつ文句を言いながら、サイトを作っている。
「だいたい、このサイトは何のサイトなんだ？」
「え？」
ミーウェイが画面に顔を寄せて、パソコンを見つめる。
「だから、何が目的のサイトなの！？」
しまった、それは考えてなかったなとアメは顔を顰めた。
「えーと、うーんと・・・あ・・アクセ・・・かな、です」
苦し紛れに適当に思いついたものを言ったのだが
その後、意外に高評価を受けた。
「アクセ！？なんでそんな「わー！いいジャン！さっすがアメ！」
文句を言おうとしたコウヤの口を完全に塞ぎ
ミーウェイはアメを褒め称えた。
「でも、アクセサリー自体はあるの？」
アンナが髪をいじりながら
現実的な質問を投げかける。
「それは見た目だけでイイのですから
どっかのサイトから写真だけ貰えばいいのですよ」
アメは笑いながら投げかけられた質問を返した。
ミーウェイとコウヤが不思議そうな顔をする。
「でもさ、『注文したアクセがこないー！』って言われたら

意味無いじゃん」
「しかもぼったくりって事で捕まるぞ」
二人はアメに講義する。
アメは得意そうにへへんと笑った。
「大丈夫！なのですよっ」
そして、近くにあった本棚から、分厚い本を引きずってきた。
ホコリがだいぶたまっている。
「わ～・・・でっかい本」
優に１０００ページはありそうなその本は
表紙に、「魔法全書」と、書いてあった。
「胡散くせぇ・・・・」
大体魔法なんてものがこの世に存在していいのか、
コウヤはあからさまに嫌そうな顔をした。
「ココ！ココ見てください」
細い指が指した先には
『自分の忠実な奴隷を作ろう』と書かれていた。
「悪趣味・・・・」
アンナが目を細めて、アメに言い放った。
アメは気にせず、パラパラとページをめくり
『インターネット』と書かれたページでとまった。
「でもさ、この本、インターネットって書かれていることは
そんなに古くないんじゃない？」
「昨日、見つけました」

―その一・このページで、インターネット上にあるｗｅｂページから
人間をなかに引きずりこむことができる―
―その二・それには契約が必要である―
―その三・契約方法は、このページに自分の血で名前を書くこと―
―その四・契約した人間だけが使える―

―その五・一度この本を使ったらすぐ捨てること―

「え・・ちょっと、待てよ。こんな胡散くせェ事ホントにやるのか！？」

「ものはためしでしょ。コウヤ君」

あたりまえでしょ、なにびびってんの？みたいな口調で

ミーウェイは言った。

「血で書けばいいなんて、古臭いわね」

「やってみればいいのです」

アメはそう笑うと、なんの躊躇いもなく

自分の手をナイフで切り裂いた。

真っ白い指に、赤い液体が滴る。

そして、その血で、自分の名前を書いた。

『アメ』と。

「それ、偽名でしょ。いいの」

アンナは指摘したが、アメは今さら書き直す気はない。

「これは偽名じゃないのです。れっきとした

私の名前です」

書き終えると、ナイフを洗ってきて

テーブルの真ん中に置いた。

「さ、次は誰ですか？」

なんの躊躇もなく、躊躇いもなく

こんなことができるなんて。

「あたしやろっか」

そう呟くと、ミーウェイも自分の指に切れ目をすっと入れた。

赤い血が滲んで、本の上にぽたりと垂れた。

ずっずと指を動かすと、

赤い文字が紙切れに滲む。

「おーわりっ！めっちゃカンタン！コウヤ、やってみ？」
口調は笑っているのに、目は笑ってないミーウェイが
コウヤにナイフを差し出した。
無言でそれを受け取ると
さくっと指に差し込んだ。
「おぉ！マジでやったか！絶対『怖いよ～』とか言うと思ってた」
「うるせぇよ。クソアマ」
おちょくられた事が頭にきたのか
コウヤはやけくそになって名前を書いていく。
「おらっ！完成したぜ。おい、次、お前だろ」
アンナは突き出されたナイフを見て、笑った。
「私、やらないわ」
「どぅして？あ、わかりました！痛いの嫌いなのですね」
「うー・・一理あるけど、私殺しは専門外なの。
殺しは、やらないから」
けたけたとアンナは笑ったが、コウヤはパソコンに向き直った。
ミーウェイも、コウヤのやってる事が気になって、パソコンにかじりついた。

「ほんとに出来るなんてね」
「あぁ、俺も嘘だと思ってた」
「わぁ・・・凄いのです」
「まさかね。じゃ、この本捨てなきゃね」
本に書いてあることは本当だった。
徐にパソコンに手を近づけると、手は飲み込まれた。
そして何かを掴んだかと思い、手を出すと
完全に気を失っている２０代前半と思われる女性が出てきた。
「たぶん、このウェブページつかってたんでしょ。
つーことは、サイト作れば引きずりこめるのね？」

「はい」
「でも、なんでわざわざそんな事するの？
別に、人引きずり込んだところでどうにもならないし
逆に怪しまれない？」
アメは冷たい目で笑った。

「殺し足らないの」
「殺したいの。この世界のみんなを」

歪んだ心が、悲劇をつくる・・・・・・・・・

なにもかもが終わる（後書き）

これで小悪魔シリーズ終わりです！
いやー、長かった！
ここまでご愛読いただきありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8824a/

小悪魔通販ができるまで

2010年10月10日01時31分発行